竹本筑後掾本『信田小太郎』

――八行本と絵入十七行本――

沙加戸　弘

一　はじめに

『信田小太郎』は、初演が元禄十四年頃と推定される竹本筑後掾（義太夫）所演の一作である。この筑後掾本『信田小太郎』には、八行本、十二行本、絵入十七行本が伝存する。管見に入ったもの総じて四本、次に掲げる。

一、早稲田大学図書館所蔵、八行六十一丁半本。（以下、早大本と略称する。）

一、東洋文庫所蔵、八行三十九丁半本。（以下、東洋文庫本と略称する。）

一、天理図書館所蔵、十二行三十六丁本。（以下、天理十二行本と略称する。）

一、早稲田大学演劇博物館所蔵、絵入十七行十四丁半細字本。（以下、演博本と略称する。）

延宝から元禄にかけて、山本角太夫や宇治加賀掾の所演作に、絵入本が先行する場合が多く見受けられる。元禄十四年頃と推定される本作の場合はどうであろうか。本稿では、天理十二行本を暫く措き、八行本と絵入本の前後関係について略述することとする。

二　八行本

早大本は全五段、省略のない正本である。よって基準とするため、先始に書誌の概略を記す。

『信田小太郎』　早稲田大学図書館蔵

一、装幀、半紙本。袋綴。二二・五×一六・一。
一、表紙、元表紙。藍地に麻葉散らし空押紋。
一、題簽、表紙中央。元題簽ではあるがほとんど剝落し、辛うじて「太」が判読できる、という程度である。痕跡は一八・三×三・四。
一、内題、信田小太郎、下部に「正本」とある。
一、匡郭、なし。
一、字高、（本文初丁表の最終行）十九・三。
一、所属、竹本筑後掾。
一、段数、五段。一丁表に「信田小太郎　正本」、十一丁表に「神おろし」、十六丁表に「第二」、二十七丁表に「第三」、四十一丁表に「第四小ぎくのまへ道行」、五十五丁裏に「第五」、五十七丁表に「信田かけものぞろへ」。
一、刊記、裏表紙見返しに、

右此本者依為懇望文句音節等
悉校合加秘蜜令開版者也

竹本筑後掾印
京二條通寺町西入北側　山本九兵衛板印
大坂高麗橋二丁目　山本九右衛門版印

とある。
一、板元、山本九兵衛、山本九右衛門。
一、丁数、六十一丁半。（六十一丁の裏は白紙）。
一、丁付、板外に存することは確認できるが、ほとんど判読不能。
一、行数、八行。
一、板心、十六丁中部に「㊁」、二十七丁中部に「㊂」、四十一丁中部に「㊃」、五十五丁中部に「㊄」。
一、挿絵、なし。
一、節譜、順に従って挙げると、次の通り。

序、ヲロシ、ハル、地中、ウ、色、詞、地色ウ、中、地色ハル、地色中、フシ、ウ中、ヲクリ、地、地色、ウハル、地ハル、スエテ、舞詞、フシウ、三重、地中ウ、下、ウフシ、キン、中ヲクリ、ハルフシ、トル、ハルコハリ、ナヲス、トル三重、上、中フシ、地ツメ、中詞、中ウ、小ヲクリ、中キン、地色ハルウ、ハルウ、地色中ウ、地ハルウ、哥、フシヲクリ、ウキン、哥ハル、ハツミ、フシハル、ヲトリ、キンハル、上ウ、地中、舞詞ツメ、フ

シ中、謠ウ、舞中、同トル、上ハル、地コハリ。区句り点は「。」。

右の他に、語り手を指定するためと思しい「太夫」「ワキ」「二人」の注記がある（十一丁表）。

この早大本は、全体として均整のとれた版面を有している。たゞ、第四の冒頭「小ぎくのまへ道行」（四十一丁表から四十三丁裏まで、三丁）が、同じ八行ながら他よりも大字になっている。（他が一行平均三十五字前後であるに対して、この部分一行平均二十五字前後と、かなり目立つ字の大きさである。）版木三面、他からの切り離しが可能であることから考えて、恐らくこれはこの部分を他の刊本、例えば段物集等へ流用するための予めの措置であろう。五十七丁表から五十九丁裏までの三丁、「信田かけものぞろへ」もやゝ字が大きく、同じ意図が読みとれる。

さて、今一本の八行本、東洋文庫本はどのような性格を有するものであろうか。

東洋文庫本は一見版木取交ぜで非常に杜撰な印象を与える。若月保治氏も『古浄瑠璃の研究　第三巻』で、古浄瑠璃『しだの小太郎』並びに説経正本『しだの小太郎』の条で、影響作として東洋文庫本に触れ、八行六十一丁半本と比して「未完本かと思はしめる」と記しておられる。

結論から先に述べると、この東洋文庫本は早大本の省略再構成本である。

大変煩雑にはなるが、論の展開上必要と思われるので、早大本の内容の概略を次に述べる。

常陸の国の大領相馬大炊介正澄の死後、一子信田の小太郎が四歳で遺跡を相続した。小太郎の姉婿小山左衛門行茂は国横領を企み、相馬譜代の家臣浮嶋隼人介に奸計を以て恥辱を与える。隼人介の妻あきしのは、一子千代若を隼人介の名代に切腹させようとするが、隼人介の兄源次兵衛に停められる。隼人介は千代若を伴って出奔する。

さらに小山左衛門は鹿島の神主右近の太夫を館に呼び、命じて小太郎を呪殺させようとするが（「神おろし」）、逆に右近の太夫の祈に苦しめられる。後、右近の太夫は小山左衛門の家老横須賀大蔵に暴行を受けるが、浮嶋源次兵衛・隼人介の弟丹三郎に救われる。

（第一）

小山左衛門に嫁した小太郎の姉初瀬姫が、腰元やお針の小菊相手に殿御談義をしているところへ、左衛門

があらわれ初瀬姫の腹帯を見つけ、不義者と罵り打擲する。姫は横須賀大蔵の計いで館から逃れる。大蔵は、国横領のために、と左衛門の怒を鎮める。

小山左衛門の館から逃れ出て入水しようとする初瀬姫を、人買いの俵口与藤次と布川の小六が捕える。姫は通りかかった丹三郎に助けられる。初瀬姫は、離縁となれば信田と小山の間が遠くなるであろうと考えての偽りの懐妊である、と明す。（第二）

小山左衛門行茂は、家臣と共に信田の館に入り、源次兵衛と小太郎を謀殺しようとするが、源次兵衛に欺かれて果せない。この騒動の中に、小菊は小太郎の生みの母であることが判明する。源次兵衛は、小太郎と家宝の系図とを小菊に托して落し、様々に奮戦するが左衛門と大蔵は逃走し、自らも深傷に倒れる。

山中に隠れ住む小菊を見つけ、隼人介は千代若を預けようと濡を仕掛ける。しかし、小太郎と会うに及んで小菊の素姓も判明、隼人介は改めて千代若を小菊に預け、仇小山左衛門行茂を討つべく三人と別れる。（第三）

小菊は小太郎・千代若二人の童子を伴って都へと志し、不破の関に至る（「小ぎくのまへ道行」）。

不破の関には二人の奉行、岩渕主水と塩江の庄司が旅人の往来を糺していた。何心なく通ろうとした小菊一行は、小山左衛門の縁類岩渕主水の厳しい吟味にあうが、塩江の庄司が何くれとなく三人を庇う。国を横領した小山左衛門を快く思わぬ塩江の庄司と、小山左衛門の意を酌んで小太郎殺害を企む岩渕主水の確執は、遂に家臣をまきこんでの争いとなるが、小菊一行は塩江の庄司の計らいで伊勢路を指して落ちのびる。

見知らぬ山に踏み迷った小菊は、小太郎・千代若を川越えさせようとして誤って水に流される。杣人に助け上げられ運び込まれた庵で小菊は息絶えるが、その庵で、小太郎・千代若・丹三郎・源次兵衛・あきしの・出家して円妙禅尼となった初瀬姫が再会を果す。

円妙禅尼を導師に、小菊の葬礼を営むところへ、岩渕主水が家臣と共に追って来る。続いて塩江の庄司が、意趣を晴さんと主水を追って辿り着く。浮嶋兄弟の助勢を得て、塩江の庄司は岩渕主水を討ち果し、切腹しようとするが人々に停められる。（第四）

常陸国桜川寺において、結縁灌頂神道切紙伝授が行われると聞き、人々はその場を仇討の場所と定める。

当日、浮嶋源次兵衛と丹三郎が小太郎の御供をして

桜川寺に出向くと、行事が隼人介と右近の太夫の計らいであったことが判明する。人々は再会を喜ぶ。

参詣した小山左衛門行茂は、十幅の掛物の謂を聞き（「信田かけものぞろへ」）、奥儀伝授を望んで内道場で横須賀大蔵ともゞ〳〵討たれる。

庭の木に輝く光の中から小菊が現われ、大炊介と契り、小太郎をもうけ、災難を救い、悪人を滅し、相馬の家を相続させるは我計らいである、我は鹿島明神の分身である、と告げ鏡と現われる。（第五）

この全五段六十一丁半の早大本に対して、東洋文庫本は三十九丁半、そのほとんどが早大本と同板である。

二丁のみが新に調製された板で、他に一枚早大本の板に手を加えたものがある。

三十九丁半を順に見てゆくと次のようになる。

内題を持つ一丁表から十五丁裏まで、早大本の一丁表から十五丁裏までと同板。すなわち東洋文庫本の第一は、早大本の第一そのまま、ということになる。

東洋文庫本の第二、丁数で言うと十六丁表から二十九丁裏までは、早大本の第三、丁数で言うと二十七丁表から四十丁裏までと同板である。東洋文庫本では、早大本の第二（十六丁表から二十六丁裏まで）が省略されたことになる。

当然のことであるが、東洋文庫本の第二の冒頭（東洋文庫本十六丁）は早大本の第三の冒頭（早大本二十七丁）と同板である。しかし、もともとの板木には「第三」の文字がある。東洋文庫本ではここは「第二」にならなければならないところである。そこで、もとの板木の「第三」の「第」の字はそのまま残し、数字の「三」の中段の第二画を削り取って「二」に直している。東洋文庫本十六丁表の「第二」の「二」の字はかなり間隔がある。試みに同倍率の映写で重ねてみると、早大本の「三」の第一画と第三画が、東洋文庫本の「二」にぴたりと合う。加えて、この東洋文庫本十六丁の板心には、もとのまま「㊂」の印字が残されていて、板木流用の傍証となっている。

東洋文庫本第三は、早大本の第四に少しく改変を加えたものである。早大本の第四は、四十一丁表から始まる。第一行目に「第四　小ぎくのまへ道行」とあって、前述のとおり大字の道行文が四十三丁裏まで三丁ある。道行は、

へうきこと。にみねの松風。引つれて。ねむつがる子の二人づれ。扨もこぎくのはてしなき。心づかひをとにかくに。もの、わかちもなみだぐむ。きげんとり〳〵ゆく道をいそげばまはるかざぐるま。我としごろ

にすみなれて。見なれしなごり今はとて。こゝろつくばの。山たかく。このもかのもにさく花の。いろかとまがふしらくもの。立ゆくあとはおほぞらの。みどりに」（四十一才）

と始まって、小太郎・千代若二人の童子を伴った小菊の前が、常陸の国から都へと志し、

ゆふひまばゆきいたびさしふはの。せき屋に三重つき給ふ。されは此関の両奉行。

と、不破の関に辿り着くまでを叙する。

ところが、東洋文庫本の第三の冒頭、三十丁は流用の板木でなく、新に調製された板で、非常に窮屈な版面になっている。第一行に「第三」とあって、第二行目から、

うきこと。にみねの松風。引つれて。ねむつかる子の二人づれ。扨も小菊のはてしなき。心遣ィをとにかくに。物のわかちも涙ぐむ。きげん取リ〳〵行ク道を急げば廻るかざ車。ふわのせきやに着給ふ。されは此関の両奉行。

と始まる。つまり、早大本の三丁に及ぶ道行文の、最初と最後を無理に継いで、都合二行余り（東洋文庫本）で道行をすまし、次へ続けているのである。そしてこのあと、早大本四十四丁の丸々一丁分十六行を、字数そのまま字間をつめて押し込んでいる。

要するにこの一丁は、早大本の四十四丁に短縮道行二行余りを加えたもの、行数で言うと原文十八行余りを、十五行に入れてしまったために、前述したような窮屈な版面になったのである。

しかし、それによってこの一丁（東洋文庫本三十丁）と、早大本の四十五丁とが過不足なく続くこととなる。付言するとこの板は、新しく調製されたために、冒頭の「第三」と板心の「㊂」とが符合している。

東洋文庫本第三はこのあと、三十一丁から三十八丁まで、早大本の板木八枚（四十五丁から五十二丁まで）を流用する。

三十九丁に至って東洋文庫本は再び新しい板木を調製する。山中の庵で人々が再会、円妙禅尼を導師に小菊の前の葬礼を営む場面、人々の悲歎述懐の部分、早大本の五十三丁表から五十四丁裏までの丁度二丁が短縮されて東洋文庫本の三十九丁になっている。全体を要訳したのではなく、早大本の五十三丁裏一行目下部から、五十四丁表五行目中部までの約十二行を省略したのである。早大本の五十三・五十四の二丁三十二行からこの十二行をぬいて、残り二十行を、東洋文庫本の三十九丁一丁十六行に収めたのである

から、前述東洋文庫本三十丁と同じく他に比して窮屈な版面となっている。

東洋文庫本はこのあと、最後に半丁早大本の第四の末尾を流用して終る。この最後の半丁すなわち東洋文庫本四十丁表は、早大本の五十五丁表と同板である。早大本五十五丁裏には第五の冒頭があり、早大本五十五丁の板心には「五」の印字がある。その印字は、そのまま東洋文庫本の四十丁に残されていて、これまた板木流用の傍証となる。

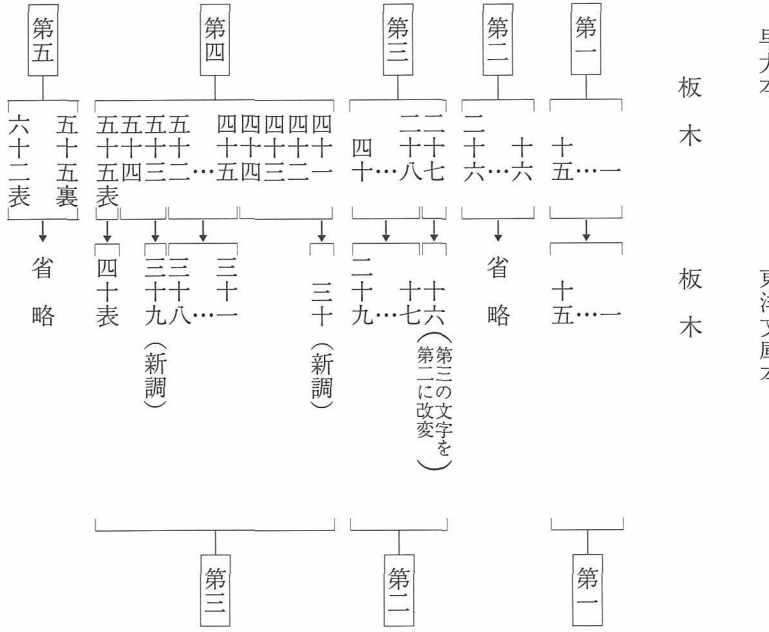
早大本の第五は省略され、東洋文庫本は全三段でここで終る。以上の板木の対応を表示すると下段のようになる。

このように見てくると、この東洋文庫本は一定の意図の下に編集・再構成された完結した本である可能性が高い。整理してみると、

一、二・五段が省略され、全三段に再構成されている。
一、省略されただけで、書き加えられた部分はない。
一、省略されたところは、動きの少ない部分である。
一、八行六十一丁半本の板木をそのまま流用している。

となる。

つまるところこの本は、八行六十一丁半本をもとに、三分の二程度に短縮された、簡略で活発な動きのある浄瑠璃を、できるだけ手間をかけずに作り上げよう、と意図した



ものであると推定できよう。

三　絵入十七行本

それでは、絵入本は如何であろうか。初に記した如く、管見に入った絵入本は演博本のみである。書誌を略記する。

『信田小太郎』　早稲田大学演劇博物館蔵

一、装幀、半紙本。袋綴。二一・二×十六・四。
一、表紙、替表紙。
一、題簽、替題簽。表紙中央。「古流歌舞伎叉始　八」と中央に墨書、上部左側に「信田小太郎」と朱書。
一、匡郭、二〇・五×一四・三。
一、内題、信田小太郎。上部に「第一」、下部に「竹本筑後掾正本」。
一、所属、竹本筑後掾。
一、段数、五段。一丁表内題上部に「第一」、四丁裏に「第二」、七丁表に「第三」、十丁裏に「第四」、十四丁表に「第五」。
一、刊記、終丁表本文末に次のようにある。

大坂かうらい橋壱町目　正本屋山本九兵衛

新版

一、板元、山本九兵衛。
一、丁数、十四丁半。
一、丁付、三……十七。
一、行数、十七行。
一、板心、上に「した」、下に丁付。
一、挿絵、六頁分（見開き三）。

二丁裏三丁表、七丁裏八丁表、十二丁裏十三丁表。

各図には次の如く説明がある。

第一・二図

「かしま大明神」「こしもとしゆ」「こしもとかたな持」「はつせのひめ」「しだの小太郎」「かんぬしうこんの太夫」「小山左衛門いかる」『しだどのはかまぎ』『木太刀入し箱』「小山がらうどう大蔵」「はやとなんぎする」「源次兵衛大小をとる」「あきしの来る」「ちよわかはだぬぎ」

「うき嶋太夫がはか」「丹三郎はか参り」『舞まひとなる』

「うこんの太夫いのる」「こんかうやしやせめ給ふ」「大蔵おそれにくる」「大ゐとくせめ給ふ」「小山左衛門くるしみ」「丹三郎かけきたる」

「小ぎくとつさへる」「小山左衛門きしよく」「こしもとさわぐ」「大蔵かけきたる」「はつせ姫なんぎし給ふ」

第三・四図

『さあはやうおち給へ』「源次兵衛しだ殿をおとす」「小ぎくわが子にあいなく」『けいづのまき物』「しだ殿は、にあい給ふ」『へいふみやぶりおとす所』

「小山左衛門げぢ」「おかべつかんとする」「源次兵衛やりをつかまへ」「大蔵きしよく」「さつしまはたらく」「下人あしをつかまへ」「村岡下よりとらまへ」

「しだ殿あそぶ」「小ぎく思はせぶり」「はやとの介ぬれをしかける」「ちよわかもる」

「もんどた、かふ所」「もんどがさふらい」「しやうした、かふ所」「しやうじがけらい」「せきしよ」「小ぎく二人のわかいだきおち給ふ」

第五・六図

「さと人おどろき川へはいる」「しだ殿なげき給ふ」「小ぎくながれ給ふ」「ちよわかなげき」

「はつせの姫あまと成給ふ」「ちよ若は、にあい」「あきしのめくらと成」「源次兵衛若君をいたき」「しだ殿かなしかる」「小きくの姫し、給ふ」「だん三郎人々に合」

「こせうしゆかたる」「はやとのすけ」「したの小太郎世に出給ふ」「うこんの太夫」『かけ物ぞろへ』「さふらいとも」「だん三郎のこ切で引きる」「小山左衛門引きられさいご」

「大蔵くひぬかる、」「源次兵衛大蔵をころす」「さふらいしゆ」（『　』は説明文に□の枠がないことを示す。）

右演博本の絵の中の説明は、前述した早大本の展開と悉く一致し、本文そのものも早大本と概ね一致している。が、用字・節譜等にはかなり大きな相違が認められる。重要と

思われる諸点について次に略述する。

まず第一に、演博本の内題下は「正本」のみではなく、「竹本筑後掾正本」とある。

次に、演博本は早大本と異なり、各段冒頭（第四を除く）に形式句を持つ。

扨も其後（序）あめつちの中につのぐむあしはらや（第一）
扨其後。（中）そらいろの衣（ウ）ほすてふさほ姫の。（第二）
去程に小山（地ハル）の左衛門行茂はいかれるいろをやはらげて。（第三）
去間かなしさの涙はつきぬ物ゆへに。（第五）

傍点を付した部分が早大本にはない。

右の二点は、早大本に比して演博本が先行したのではないか、と推測させる根拠の一となりうる。

しかしながら、相違点は右二点だけではない。本文は概ね早大本と一致していると前述したが、全文照合すると演博本は二箇所に省略がある。

一箇所は第四の「小ぎくのまへ道行」中で、

早大本	演博本
ねざめ（哥ハル）のさとの。（中）	ねざめのさとの。（中）

と、十九字が省略されている。

今一箇所は第五で、桜川寺に参詣した小山左衛門行茂が、浮嶋隼人介と右近の太夫に罪を責め問われる場面で、

早大本	演博本
しづ（ハル）のめ共が。	しづ（ハル）のめ共が。
ひる（ハル）はなはおび。	ひる（ハル）はなはおび。
なはだすき。よ（ハル）	なはだすき。よ（ハル）
るはりんずの。	るはりんずの。
やえまはり。	やえまはり。
りんずのよる（ハル）は。	
よるはりんずの（ハルフシ）	
やえ（四十二才）	
まはり。	
むすぶ（中ウ）ちぎりは	むすぶ（中ウ）ちぎりの
ながはし（ウ）のなが	ながはし（ウ）のなが
ゝれとこそいの	ゝれとこそいの
りしに。	りしに。
某は園より	某はもとより

しやうじきしや
うろにて。かみ
すぢ一つも囲に
そむきしことは
いたさぬ。
ヤアいたさぬ。
シテつみは少も
おりないとや。

しやうじきしや
うろにて。かみ
すぢ一つも切に
そむきしことは
いたさぬ。
シテつみは少も
おりないとや。

と、六字が省略されている。

この二箇所の省略、共に繰返しの部分であることに注目させられる。即ち、省略された文の末尾と直前の文の末尾とが同一であること、両所に共通しているところから、目移りによる誤写の可能性が高い、と考えられるのである。加之、この二箇所以外に、早大本と演博本の文辞の相違がない、ということを考え併せると、誤写の可能性は更に高くなる、と言えよう。

次に、用字に眼を転ずると、これには非常に明確な特徴がある。早大本で漢字表記されていた語、あるいは漢字表記されて振仮名が付されていた語が、多く平仮名に改められているのである。この例を、品詞を単位として数えてみると、延数は九百例に近い。逆に、早大本で平仮名表記されていたものが演博本で漢字表記に改められている、という例は同じく延数で百五十に満たないので、その差は歴然としている。

さらに、正本の生命とも言うべき節譜を見ると、これまた極めて明瞭な特徴を有している。演博本は節譜が省略されているのである。（本文省略の二例中、第一例中にも「哥ハル」の省略がある。）早大本に付されていて、演博本に省略された文字譜は延数で百三例、中に「フシ」六例、「ヲクリ」三例を含んでいる。逆に、演博本にあって早大本にはない、という文字譜は延で十六例、「フシ」、「ヲクリ」は含まれていない。

付加された文字譜よりも、省略された文字譜が圧倒的に多い、しかも省略された中には節目となる重要な文字譜も一再ならず含まれている、ということになれば、演博本は節譜の面から言うとかなり簡略化された正本である、ということになる。

加えて、早大本で「五ざう六ふ」（五臓六腑）とあるところ、演博本では「五ざう六六」と記されている。このように、転写の際の誤によって意味が通じなくなっている所が、演博本にはかなり多く見受けられる。

以上、総合してみると、演博本は、形式としては古風を復活させながら、用字を平仮名に改め、節譜を簡略化し、絵入本にして、読みやすさと親しみやすさとを強調した後出本、と考えることができよう。

四　むすびにかえて

以上述べ来ったように、竹本筑後掾本『信田小太郎』では、八行本が先行した。このようになった段階の絵入細字本は、絵入本が先行した場合と、当然その性格を異にしている筈である。また、いつ頃がその境となるのか、あるいはなぜそうなったか等、疑問は多い。

さらに、冒頭に述べたように、筑後掾本『信田小太郎』には今一本、天理十二行本がある。この十二行本を視野に入れた場合どのようになるのか等、本稿の不備と併せ課題としたい。

◎本稿中、引用の資料に人権を侵すと考えられる表現があるが、研究の原資料としての意味を考慮し、改変等の措置はとらなかった。

◎本稿を草するにあたり、早稲田大学図書館、早稲田大学演劇博物館、東洋文庫、天理図書館、他多くの図書館の御好意をいたゞいた。記して篤く御礼申し上げる。

（本学助教授・国文学）